



<SL>

# 日常に潜む子どもへの危険

日常生活にはさまざまな危険が潜んでいる。特に子供たちはその危険が身をまわることができず、事故に遭いやすい。一歳から十九歳までの死因で最も多いのは不慮の事故だ。そこで最新の技術を駆使して、事故防止策を探ろうという研究が進められている。

## 運れている日本

事故を防ぐには、過去の事故に学ぶことが不可欠だ。オーストラリアや米国、タイなど事故情報を集めるシステムを持つ国は少なくない。

「しかし日本にはそうしたシステムがない。何が起こっているのかすら分からない」と産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究センターで人間行動理解チームを率いる西田佳史さんは言う。

事故情報を集めるシステムを構築し、データ分析を病院のカルテには普通、けがの種類や部位ぐらいしか記録されない。

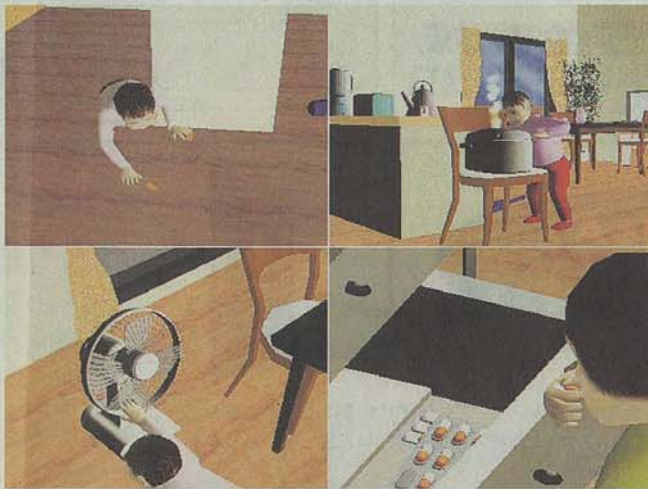
## 健康医療

# 最新技術で事故防止

そこで過去の事例を踏まえ「一緒にいた人」「事故に関係がある物」など、状況を再現して防止に役立てるのに必要な入力項目を設けた。

六歳未満の子供が年間約二千人、けがで受診する。生活空間を模した実験室で、乳幼児の動きを分析し、これまでの実験で九

## 情報収集システム開発



事故を再現する動画のイメージ（産総研デジタルヒューマン研究センター提供）

カ月から一歳の子は、手を伸ばせば届く四十センチ離れた物体に最も興味を持つことが分かった。

### 動画で事故再現

乳幼児は「くぐり」の動き、動き、一日に何回転も、何回もつかむの動き。これは、筋肉の動きを測る携帯型センサーを赤ちゃんと付け、家庭や保育園などで行動を観察する計画だ。

こうした研究を踏まえ、現実を起きしめた事故や起る得る事故の動画を自動的に作るシステムを作り上げるのが当面の目標という。

インターネットを使って、一般から事故情報を集める仕組みも検討中。ある企業の協力で子供を持つ約三千人を対象に情報収集を進めている。

研究結果は積極的に公表する方針で、研究者や企業の参加を期待する。「事故防止だけでなく、育児支援や安全な商品の開発にも役立つ」と本村さんは指摘する。

最新技術を事故防止に使う「こうしたシステムは世界に例がなく、タイや米国から一交通事故防止に使えないか」との打診もあるという。

「教育・育児」  
男性更年期外來には、社長や取締役などの立派な肩書を持つ一億長者も少なくありません。定年までは順風満帆

度々旅行は行けません。ゴロたつたって、忙しい仕事の合間だから楽しいので、いつまでも遊んでやる仲間を集め

たせいで、毎日するものが一つからなはれのです。六十歳以降の女性なら、食事の支度や掃除、洗濯で遊

社では有能だったのかもしれないが、家庭では足手まといです。家事などで自立できない人

みのさんが闘病記出  
腰痛治療体験  
タレントのみのさん 記「これ

# 事故情報収集システム開発

日常生活にはさまざまな危険が潜んで。特に子供たちはその危険から身を守る事ができず、事故に遭いやすい。一歳から十九歳までの死因で最も多いのは「不慮の事故」だ。そこで最新の技術を駆使して、事故防止策を探ろうという研究が進められている。

## 遅れている日本

事故を防ぐには、過去の事故に学ぶことが不可欠だ。オーストラリア

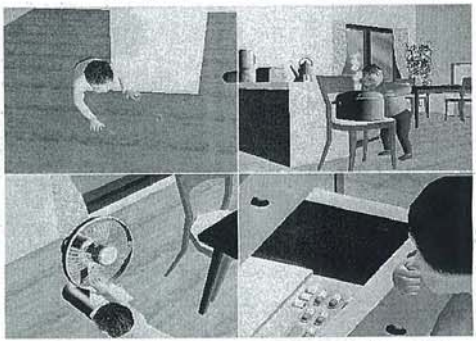


や米國、タイなど事故情報を集めるシステムを持つ国は少ない。「しかし日本にはそうしたシステムがない。何が起きているのか分からない」と産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究センターで人間行動理解チームを率いる西田佳史さんは言う。



事故情報収集システムの入力画面  
(産総研デジタルヒューマン研究センター提供)

事故を再現する動画のイメージ(産総研デジタルヒューマン研究センター提供)



事故情報を集めるシステムを構築し、データ分析を基に工学的な対策を考える。西田さんの研究チームは三年前から横浜市の医師、山中龍宏さんと、そんな枠組みづくりに取り組んできた。西田さんと同センター主任研究員の本村陽一さんは山中さんの協力で四千百件の事故情報を収集。それを基に、事故に遭った子供を診察した医師がパソコンで情報を入力するシステムを開発した。

## 法則を探せ

病院のカルテには普通、けがの種類や部位でいろいろと記録されない。そこで過去の事例を踏まえ「一緒にいた人」「事故に関係がある物」など、状況を再現して防止役立ちするのに必要な入力項目を設けた。

六歳未満の子供が年間約三千人、けがで受診する国立成育医療センター

# 日常の子供の危険防止へ

(東京都世田谷区)で、今年からのシステムの検証を始める。西田さんは「実際に使ってもらいたい」と語る。病院にも展開したい」と語る。これと別に西田さんらは乳幼児の行動を観察し「行動の「法則」を探している。

生活空間を模した実験室で、乳幼児の動きを分析。これまでの実験で九カ月から二歳の子は、手を伸ばせば届く四十センチほど離れた物体に最も興味を持つことが分かった。

「この発達段階ではこういう行動をする」という、緩い「法則」が分れば、危険度の高い状況を予測することができ(2)(本村さん)

## 動画で再現

乳幼児はどれくらいの速さで動き、一日に何回飛び、何回物をつかむのか。次は、筋肉の動きをどう伝える携帯型センサーを赤ちゃんと付け、家庭や保育園などを観察する計画だ。いつか研究を踏まえ、現実起きてしまった事故や起り得る事故の動画を自動的に作るシステムを作り上げることが当面の目標という。

インターネットを使って、一般から事故情報を集める仕組みも検討中。ある企業の協力で子供を持つ約二千人を対象に情報収集を進めている。

研究結果は積極的に公表する方針で、研究者や企業の参加を期待する。「事故防止だけでなく、育児支援や安全な商品の開発にも役立つはず」と本村さんは指摘する。

最新技術を事故防止に使う、こうしたシステムは世界に例がなく、タイや米國から交通事故防止に使えないかとの打診もあるという。

秋田さきがけ 2006-5-15

# けんこう

## 子供の事故

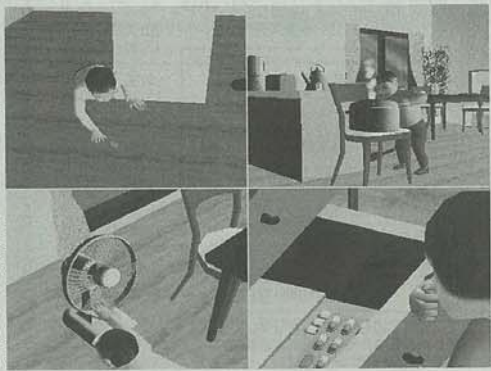
る。

# 情報収集し分析 未然防止に活用

事故を防ぐには、過去の事故に学ぶことが不可欠だ。オーストラリアや米国、タイなど事故情報を集めるシステムを持つ国は少なくない。「しかし日本にはそう

事故情報を集めるシステムを構築し、データベースを構築し、データを基に工学的な対策を考える。西田さんらの研究チームは三年前から横浜市の医師、山中龍宏さんと、そんな枠組みづ

の協力で四五百件の事故情報を収集。それを基に、事故に遭った子供を診察した医師がパソコンで情報を入力するシステムを開発した。

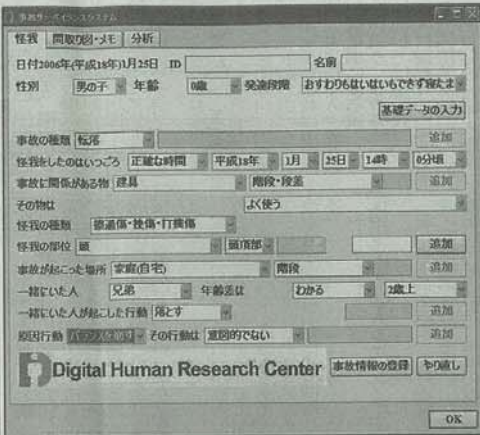


## 診察医がデータ入力

くりに取り組んできた。西田さんや同センター主任研究員の木村陽一さんは山中さん

展開したい」と語る。これとは別に西田さんらは乳幼児の行動を観察し、行動の「法則」を探している。生活空間を模した実験室で、乳幼児の動きを分析。これまでの実験で九ヶ月から二歳の子は、手を伸ばせば届く四〇センチほどの離れた物体に最も興味を持つことが分かった。

乳幼児はどれくらいの速さで動き、一日に何回転び、何回物をつかむのか。次は、筋肉の動きをとらえる携帯型センサーを赤ちゃんに付け、家庭や保育園などで行動を観察する計画だ。こうした研究を踏まえ、現実には起きてしまった事故や起こり得る事故の動画を自動的に作るシステムを作り上げるのが当面の目標と



供

【この発達段階ではこ

けることが当面の目標と

止に使えないか」との打

痛みの治療を専門にする診療所（ペインクリニック）で、患者さん

首腸の手術時などに行つた腰椎麻酔のように、硬膜外ブロックよりも強い麻酔効果が現れます。足が動かなくなったり、血圧が下

インターネットを使って、一般から事故情報を集める仕組みも検討中。ある企業の協力も検討中。持つ約二千人を対象に情報収集を進めている。研究結果は積極的に公表する方針で、研究者や企業の参加を期待す

HEALTH

「不慮の事故」

# 最新技術で 子供を守れ

日常生活にはさまざまな危険が潜んでいる。特に子供たちはその危険から身を守ることができず、事故に遭いやすい。一歳から十九歳までの死因で最も多いのは「不慮の事故」だ。そこで最新の技術を駆使して、事故防止策を探ろうという研究が進められている。

## 遅れている日本

事故を防ぐには、過去の事故が学ぶことが不可欠だ。オーストラリアや米國、タイなど事故情報を集めるシステムを持つ国は少なくない。「しかし日本にはそうしたシステムがない。何が起きているのかすら分からない」と産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究センターで人間行動理解チームを率いる西田佳さん(以下、西田さん)は言う。

事故情報を集めるシステムを構築し、データ分析を基に工学的な対策を考える。西田さんらの研究チームは三年前から横浜市泉区の医師、山中龍宏さん(緑園)とモリニック院長)と、そんな枠組みづくりに取り組んでいた。西田さんや同センター主任研究員の

本村陽一さんは山中さんの協力で四千五百件の事故情報を集めた。それを基に、事

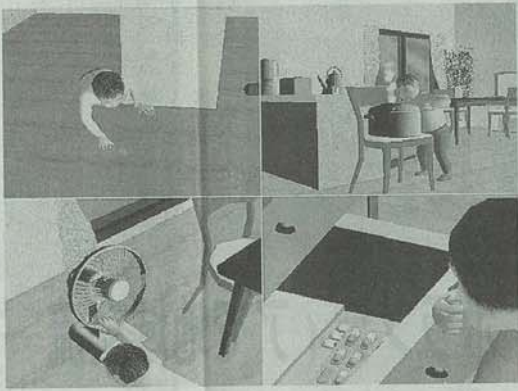
## 日常生活に潜む危険

故に遭った子供を診察した医師がパソコンで情報を入力するシステムを開発した。

行動の法則探せ  
病院のカルテには普通、けがの種類や部位ぐらいしか記録されない。そこで過去の事例を踏まえ、一緒に

## 乳幼児の動き 分析し予見へ

情報収集  
システム開発



行動の法則探せ  
病院のカルテには普通、けがの種類や部位ぐらいしか記録されない。そこで過去の事例を踏まえ、一緒に

## 動画で事故再現

「この発達段階ではこういう行動をするという。緩い」法則が分ければ、危険度の高い状況を見ることができると(本村さん)

乳幼児はそれくらい速さで動き、一日に何回転び、何回物をつかむのか。次は、筋肉の動きをとらえる携帯型センサーを赤ちゃんに付け、家庭や保育園などで行動を構築する計画だ。こうした研究を踏まえ、現実起きてしまった事故や起り得る事故の動画を自動的に作るシステムを作り上げるのが当面の目標という。

インターネットを使って、一般から事故情報を集める仕組みも検討中。ある企業の協力で子供を持つ約二千人を対象に情報収集を進めている。

研究結果は積極的に公表する方針で、研究者や企業の参加を期待する。「事故防止だけでなく、育児支援や安全な商品の開発にも役立つはず」と本村さんは指摘する。最新技術を事故防止に使う、こうしたシステムは世界に例がなく、タイや米國から「交通事故防止に使えないか」との打診もあるという。

事故を再現する動画のイメージ(産総研デジタルヒューマン研究センター提供)





## 1-19歳 最も多い死因 不慮の事故



事故を再現する動画のイメージ(産総研デジタルヒューマン研究センター提供)

産業技術  
総合研など

### システム開発着々

立てるのに必要な入力項目を設けた。

六歳未満の子供が年間約二千人、けがで受診する国立成育医療センター(東京都世田谷区)で、今年からこのシステムの検証を始める。西田さんは「実際に使えるようになれば、ほかの病院にも展開したい」と語る。

これとは別に西田さんは「乳幼児の行動を観察し、行動の「法則」を探している。生活空間を模した実験室で、乳幼児の動きを分析。これまでの実験で九月から二歳の子は、手を伸ばせば届く四丁棒ほど離れた物体に最も興味

を持つことが分かった。「この発達段階ではこういう行動をするという、緩い法則が分ければ、危険度の高い状況を示現することができる」と本村さん

# 情報集めて防止策を

日常生活にはさまざまな危険が潜んでいる。特に子供たちはその危険から身を守る事ができず、事故に遭いやすい。一歳から十九歳までの死因で最も多いのは「不慮の事故」だ。そこで最新の技術を駆使して、事故防止策を探っていく研究が進められている。

事故を防ぐには、過去「からない」と独立行政法の事故に学ぶことが不可欠だ。オーストラリアやデジタルヒューマン研究センターで人間行動理解チームを率いる西田佳史さんは言う。

幅広い入力項目

事故情報を集めるシステム

西田さんと同センター主任研究員の本村陽一

病院のカルテには普通、けがの種類や部位、通、けがに記録されない。そこで過去の事例を踏まえ、「一緒にいた人」事故に関係がある物など、状況を再現して防止に役

動画で事故再現

乳幼児は、どれくらいの速さで動き、一日に何回動くか、何回物をつかむのか。次は、筋肉の動きをセンサーで捉え、動作を観察する計画だ。

こうした研究を踏まえ、現実には起きてしまった事故や起こり得る事故の動画を自動的に作るシステムを作り上げることが当面の目標という。

インターネットを使う

で、一般から事故情報を集める仕組みも検討中。

ある企業の協力で子供を持つ約二千人を対象に情報収集を進めている。

研究結果は積極的に公表する方針で、研究者や企業の参加を期待している。「事故防止だけでなく、育児支援や安全な商品の開発にも役立つ」と本村さんは指摘する。



## 日常生活に潜む危険

子どもの事故防ぎ  
情報収集システム

日常生活にはさまざまな危険が潜んでいる。特に子供たちはその危険から身を守ることができず、事故に遭いやすい。一歳から十九歳までの死因で最も多いのは「不慮の事故」だ。そこで最新の技術を駆使して、事故防止策を探ろうという研究が進められている。

事故を防ぐには、過去の事故に学ぶことが不可欠だ。オーストラリアや米国、タイなど事故情報を集めるシステムを持つ国は少なくない。

「しかし日本にはそうしたシステムがない。何が起きているのかすら分からない」と産業技術総合研究所デジタリヒューマン研究センターで人間行動理解チームを率いる西田佳史さんは言う。



事故を再現する動画のイメージ(産総研デジタリヒューマン研究センター提供)

事故情報を集めるシステムを構築し、データ分析を基に工学的な対策を考える。西田さんらの研究チームは三年前から横浜市の医師、山中龍宏さんと、そんな仕組みづくりに取り組んできた。

## 世界唯一 最新技術を駆使

西田さんと同センター主任研究員の木村陽一さんは、山中さんの協力で四千五百件の事故情報を収集。それ



事故情報収集システムの入力画面(産総研デジタリヒューマン研究センター提供)

を基に、事故に遭った子供離れた物体に最も興味を持つことが分かった。

で情報を入力するシステムを開発した。

病院のカルテには普通、けがの種類や部位ぐらいしか記録されない。そこで過去にの事例を踏まえ、「二階に

いた人」「事故に関係がある動き、一日に何回転ぶ」「物」など、状況を再現し、何回物をつかむのか。次に防止に役立てるのに必要は、筋肉の動きをとらえるな入力項目を設けた。

六歳未満の子供が年間約二千人、けがで受診する。立成育医療センター(東京都世田谷区)で、今年からこのシステムの検証を始め、都世田谷区)で、今年から現実起きてしまった事故の自動的になるシステムを作

る。西田さんは実際に使えようになれば、ほかの病院内にも展開したいと語る。という。

は乳幼児の行動を、インターネットを使って、一般から事故情報を集観察し、行動の法める仕組みも検討中。ある生活空間を模し、二千人を対象に情報収集をた実験室で、乳幼進めている。

研究結果は積極的に公表される方針で、研究者や企業九カ月か二歳の参加を期待する。「事故子は、手を伸ばせば、育児支援は届く四十秒ほど、や安全な商品の開発にも役立つはず」と木村さんは指

最新技術を事故防止に使う行動をするという、緩う、こうしたシステムは世

い法則が分かれれば、危険界に例がなく、タイや米

度の高い状況を見直すから「交通事故防止に使える

ないか」との打診もあると

# 最新技術で防げ

## 日常生活に潜む子どもたちの事故

日常生活にはさまざまな危険が潜んでいる。特に子どもたちはその危険から身を守ることができず、事故に遭いやすい。一歳から十九歳までの死因で最も多いのは「不慮の事故」だ。そこで最新の技術を駆使して、事故防止策を探ろうという研究が進められている。

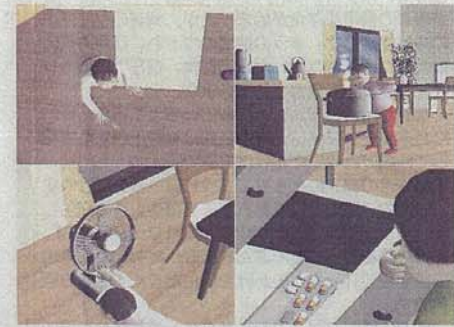
## 情報収集システム開発が着々

事故を防ぐには、過去の事故を学ぶことが不可欠だ。オーストラリアや米国、タイなど事故情報を集めるシステムを持つ国は少なくない。「しかし日本にはそうしたシステムがない。何が起きているのかすら分からない」と産業技術総合研究所デジタルヒュー



事故情報収集システムの入力画面（産総研デジタルヒューマン研究センター提供）

マン研究者らによって人間行動理解チームを率いる西田佳文さんは言う。事故情報を集めるシステムを構築し、データ分析を基に予防的対策を考える。西田さんらの研究チームは三年前から横浜市の医師、山中龍宏さんと、そんな仕組みづくりに取り組んできた。



事故を再現する動画のイメージ（産総研デジタルヒューマン研究センター提供）

析「これまでの実験で九カ月から二歳の子は、手

を伸ばせば届く四十センチほど離れた物体に最も興味を持つことが分かった。「この発達段階ではこうした行動をすることが多い。緩い法則が分かれれば、危険度の高い状況を予測することが可能」（本村さん）

乳幼児はどれくらいの速さで動き、一日に何回転び、何回物をつかむのか。次は、筋肉の動きを捉えられる携帯型センサーを赤ちゃんに付け、家庭や保育園などで行動を観察する計画だ。こうした研究を踏まえ、現実起きてしまった事故や起こり得る事故の動画を自動的に作るシステムを作り上げることが当面の目標という。

社会活動、5人表彰  
社会活動に積極的に取り組むパーキンソン病患者と支援

### 場

後も活動を支援する惣坊君代さん(80)と和歌山県新宮市、が受賞。  
審査員賞は大井健さん(63)

リリーが主催今年が第4回。極端な怠惰、病氣？

がこの病気に当てはまり、同国経済に年間24億オーストラリアドル(約2000億円)の損害を与えているとのこと。

